「アジア・キリスト教・多元性」研究会
第19-1号　2019年10月　39～49頁

書 評

# 東アジア・キリスト教研究における思想と歴史のコンシリエンス
## ――芦名定道著「キリスト教研究叢書」全３巻の紹介――

洪　　伊 杓

### １．はじめに

一般的な「歴史教育・研究」においては、「自国史」(日本史)と「世界史」の間には高い壁が存在する。[1] キリスト教史の分野においても「西洋キリスト教」と「日本キリスト教史」が区分され、二つの分野が連続性よりも断絶的・破片的に扱われる傾向があった。これは日本のキリスト教と神学思想がより閉鎖的に分析され、東アジアのキリスト教、さらに世界のキリスト教の全体像の中でどのような意味を持っているのかを究明する時にも限界をもたらした。

最近『〈グローバル・ヒストリー〉の中のキリスト教――近代アジアの出版メディアとネットワーク形成』(新教出版社、2019)という書物が発刊された。「グローバル・ヒストリー」とは何を意味するのか。代表著者のミラ・ゾンタークは「韓国と中国ですでに導入されている『東アジア史』は……自国史と世界史との溝を埋めることはできていない」[2]とし、近年の日本で既存の「世界史」への新しいアプローチとしての「グローバル・ヒストリー」を提案する。「グローバル・ヒストリー」とは、世界各地の動向を共同研究によって包括的に分析し、人類普遍的な諸過程を「統合」しながらも各地の多様性を「差異」としてまとめる方法論である。ミラ・ゾンタークなどは今まで欧米宣教史としての「西洋」とキリスト教受容者としての「東洋」が、「世界史」と「自国史」(日本史)として分かれて考察されたことを克服するために「19世紀末～20世紀初頭のキリスト教ネットワーク」を「近代メディア」

[1] 茨木智志は「『歴史教育』という言葉は自国史教育と同義に使用される場合が多く……世界史は自国史を除いた外国史と同義とみなされる場合も少なくない」と指摘した。(茨木智志「『歴史』教育における自国史と世界史の課題――戦後日本の中学校社会科歴史的分野の成立と展開に焦点を当てて」『歴史教育史研究』12、2014年、37.)

[2] ミラ・ゾンターク編『〈グローバル・ヒストリー〉の中のキリスト教――近代アジアの出版メディアとネットワーク形成』、東京：新教出版社、2019、3.

に着目して分析した。[3] しかしこのようなアプローチも、インド、フィリピンを経て日本、中国、台湾、朝鮮における近代キリスト教系の新聞・雑誌の比較研究が中心になっている。結局「グローバル・ヒストリー」の基本的な究明課題として「東アジア史」という「差異」(比較)のレンズを通して世界に繋がる「統合」が可能になっていることが確認される。

世界宗教であるキリスト教の「普遍性」がアジア各地の「特殊性」の中でどのように具現化されたのかを明らかにするこのような最近の研究傾向は、実は芦名定道によってすでに10年前から「思想史」と「交流史」の地平融合という試みとして行われていた。ソフトウェア中心の「思想」の交流や融合は、ハードウェア中心の「人的・物的」交流より古代・中世時代からより広く行われて来た。したがって、「思想交流史」の観点からアプローチするのは、上記の「グローバル・ヒストリー」をより幅広く展望できるように導く可能性がある。最近、芦名は今まで蓄積して来た諸論文をまとめ、三冊の単行本として発表したが、それは「日本のキリスト教思想史」から出発し、それを日・中・韓三国の比較まで拡張し、2000年の歴史を有するキリスト教思想の現在的価値と意味を見出す意義深い試みである。ここでその内容と意義を紹介することによって読者の参考になることを願う。

## １．書物の紹介

### (1)芦名定道『近代日本とキリスト教思想の可能性――二つの地平が交わるところにて』

名古屋：三恵社、2016年4月
Ａ５版 216頁　2,300円＋税

芦名は、東アジアのキリスト教がもっとも興味深い一つの研究対象になる理由について「キリスト教とは異なる宗教文化的伝統との本格的な交渉に伴う問題状況」と西欧近代のコロニアリズムが集約的に現れているが、それが「日・中・韓において、それぞれ異なる仕方で現実化している」(芦名、2019、101)点を強調する。このような東アジアのキリスト教を分析するために、著者は方法論的モデルとして「地平モデル」を提案する。これは「東アジアのキリスト教」における「の」を、東アジアとキリスト教という二つの地平の「融合」と、そこでの新しい地平（＝東アジアのキリスト教）の生成としてモデル化する試みを意味する。この新しい地平の内部には、「地平内部での諸動向の相互作用」が書き込まれ、「重層性」構造が形成されることになる（芦名、2016、28）。そしてこの地平モデルがさらに精密化する中で、東アジアのキリスト教に対する「比較論」や「交流史」（「関係史」）という二つのアプローチも可能になると説明する。

[3] その具体的な方法論として遠隔地の信徒との間で形成された相互認識を主に分析して来た「グローバル・クリスチャニティのミュンヘン学派」のアプローチを参考する。; 上掲書、6.

このような研究方法論が、2016年に３冊のシリーズで出版された『近代日本とキリスト教思想の可能性――二つの地平が交わるところにて』の「第一章：『アジアのキリスト教』研究に向けて――思想の解釈学的構造」にまとめられている。そして東アジアにおけるキリスト教の多様性を説明するための「比較」と「交流」は、「循環的な関係性であり、この動的な循環構造こそが地平モデルの具体的な一面」(芦名、2019、102)であると述べ、「交流」の実質的な主体は結局「国家・民族」、「地域」、「人」に帰結して行く。したがって芦名は 「第二章：日本キリスト教思想史の諸問題–思想史と社会史、そして民衆史へ」において「思想のイデオロギー性」を検討した上で、土肥昭夫が包括的に設定したキリスト教史の研究業績からより豊かなキリスト教史の叙述可能性を模索しなければならないとする。代表的な例として「東アジアにおける聖書翻訳」の研究を挙げている。その領域には古代から現代までの思想史(神学、哲学、言語学、文学、社会学など)の解明が必要であり、伝道者(キリスト教)と受容者(東アジア)の間に行なわれた「地平融合」が見つけられるからである。(芦名、2016、72-73)

しかし芦名は、このような作業の一歩として基本的な主体になる「日本のキリスト教の思想」の核心的な実体を再び分析する。「東アジア・キリスト教」を論ずる前に、「日本・キリスト教」を先行的に解釈することが求められるからだ。したがって「第二部：近代日本とプロテスタント・キリスト教」において、まず「第3章：海老名–植村のキリスト論論争」(1901-1902)を分析している。これは、ヨーロッパの「アドルフ・フォン・ハルナックとカール・バルトの神学論争」(1923)とよく比較されるが、キリスト教受容者としての日本人の間で行われたこのような本格的な思想論争が、東アジアの各地域・各民族の間の多様性として拡大して行く可能性を再発見することになる。「第４章：海老名弾正と自由主義神学」では、ドイツの自由主義神学を自分なりに受け入れ、日本という現場に適用しようとした海老名の試みを分析し、「今後のアジア・キリスト教思想史を……キリスト教全体へと開かれた問題設定において位置づけた上で、日本とアジアの特殊性を正当に評価する」(芦名、2016、158)ための根拠を構築した。「第５章：植村正久と弁証神学」では、「欧米・キリスト教」が「日本またアジア的伝統」と関わる中で生じる「問いと答え」を究明した。日本という地における日本人キリスト者の「キリスト教弁証」は結局日本(アジア)の宗教的伝統との関係で積極的に遂行されるからである。ここで生み出された「答え」は結局「現代日本における宗教的問い」にまで延長しているため、植村の弁証論は現在の東アジア・キリスト教の多様性を明らかにするためにも重要な思想形成の基盤になると考えられる。

このように、芦名定道の『近代日本とキリスト教思想の可能性――二つの地平が交わるところにて』(2016)は、「東アジア・キリスト教」研究の地平を拡張するため、まず「日本のキリスト教思想史」という出発点から基礎的に再考察を行っている。これは東アジア・キ

リスト教の「交流史」や「関係史」をより本格的に広めて行くための先決課題でもあるからだ。

**(２)芦名定道『東アジア・キリスト教の現在』**　　名古屋：三恵社、2018年3月
Ａ５版 104頁　1,800円＋税

2018年に発刊された『東アジア・キリスト教の現在』は、「日本のキリスト教思想史」に注目した第１巻の問題意識をより広げ、東アジアの現在まで拡大させた。「第一章：東アジアの宗教状況とキリスト教――家族という視点から」においては、「家族」や「家」というキーワードに着目し、そこから東アジア、特に中国、韓国、日本のそれぞれ異なる儒教に対する温度差と多元的な宗教状況を見出している。このようなアプローチは、東アジアにおける「新しいキリスト教形成」という課題を具体化するためにも「不可欠な前提条件」(芦名、2018、23)であると述べる。

さらに、こうした観点は「第二章：死者儀礼から見た宗教的多元性」において日本と韓国におけるキリスト教の葬儀文化の急激な変化を比較することでより実質的な研究に繋がっている。未だに日韓両国において死者への儀礼は他宗教への排他性を積極的に現す原因になっている。宗教的多元性とそれに伴う「寛容」の問題がもっとも尖鋭なる地点の一つがこの葬儀である。著者は「寛容」をめぐる日韓の相違点は、各々社会におけるマイノリティとマジョリティという二つの力の方向性が相互に媒介していることを統一的に理解すべきであるとする。(芦名、2018、45)このような議論は自然に「第三章　：東アジア世界における宗教的寛容と公共性」において市民社会などの「公共性」を生成するため宗教がどのように寄与できるかを展望し、次のように主張する。

> 「東アジアというフィールドの有する意味は大きい。東アジアの宗教的状況には、宗教的な多元性と重層性という構造とそれに伴う問題が典型的な仕方で現れているからだ。東アジアの宗教的伝統は、宗教的寛容に関わる長い問題の歴史的展開を有しており、キリスト教思想における宗教的寛容論を構築する上で、特にこれまでのキリスト教思想における議論を相対化するために、多くの示唆をあたえてくれるように思われる。」(芦名、2018、66)

最後に、著者は「第四章：アジアのキリスト教とナショナリズム――内村鑑三の非戦論との関連で」において、「キリスト教とナショナリズム」の問題、すなわち東アジアにおける「国家や民族」をキリスト教がどのように受け取るべきなのかを内村鑑三の「二つのＪ」

（JesusとJapanへの愛）概念に着目して分析している。このような試みは、第三章で取り扱ったキリスト教の多様性が「それぞれの国家・地域とナショナリズムの関連において解釈できるとの仮説に従って」(芦名、2018、72)試みられた。著者は「キリスト教の多様性を近代以降のナショナリズムとキリスト教との関係性という観点から整理することの重要性」を強調しつつ、「1900年頃に、中国、韓国、日本のキリスト教は伝統的な宗教文化との関わりで共通の問題に直面し、それぞれの地域における浸透度についても類似の状況にあった」(芦名、2018、74)ことを根拠として提示する。海老名・植村と同様に武士階級出身であった内村の「非戦論」また「平和論」が持っている特質について著者は「内村の非戦論から、弱者の視点・庶民の視点を読み取ることができるという点」、すなわち「日清日露戦争が庶民や弱者にいかなる悲惨さをもたらしたかについて、内村が共感的な眼差しを有していること」を強調する。これを「自己超越的ナショナリズムと愛国のメタファー化 」(芦名、2018、83-85)と説明する。内村にとって「イエス・キリストあるいは神は、言わば「日本」の上位」であり、「神の国の具体的な形が、農業を中心とした非軍事的な小国だった」(芦名、2018、84)とする。これは国家主義や民族主義に過度に傾倒する中国や韓国のキリスト教が注目し共有することのできる部分である。したがって著者は「異なる宗教的信念に立つ多様な宗教者が、東アジアの宗教的多元性という文脈において国家・民族と宗教の関係性を問い直す共通課題に取り組むとき、その共同作業は、宗教的多元性に基づく宗教間対話の営みを通した「公共性」の生成の場となることが期待できる」(芦名、2018、87)と結論付けている。

このように第２巻は、東アジアのキリスト教のより実態的な側面に焦点を合わせて、キリスト教と社会について、親密圏から公共圏へ高調・進展して行くような構成で議論を行っている。つまり、(第１章)親密圏としての「家族・家」の問題から、(第２章)その家を基盤とする死者への儀礼と寛容の問題を扱い、(第３章)その後「地域共同体など市民社会」における公共性の問題を経て、(第４章)「「ナショナリズム」（国家・民族）にまで議論を拡張し、東アジアの宗教的な実体を明らかにしようと試みたのである。そして各章のテーマは、すべて日・中・韓という東アジアの諸地域(国家)を比較する方法論的な前提が充実しており、文献分析とともに現地調査というバランスを合わせている。

**(３)芦名定道『東アジア・キリスト教研究とその射程』**　名古屋：三恵社、2019年4月
Ａ５版 130頁　2,000円＋税

第２巻において内村鑑三の非戦論と平和主義が扱われた延長線上で、第３巻『東アジア・キリスト教研究とその射程』では日本の無教会キリスト教の代表者３人、すなわち内村鑑三、矢内原忠雄、南原繁を中心として、東アジア・キリスト教研究の新たな可能性と方向性を展

望している。そのような執筆意図については「第一章：近代キリスト教と無教会キリスト教のダイナミズム」の中で次のように説明している。

「無教会とは何かという問は、すでに解決済みのものではなく、いまだ係争中の問題であると言わねばならない。なぜなら、内村とその弟子たちが追及したキリスト教を近代日本に伝道するという課題は続く世代への継承を求めつつ、現在、進行中だからである。……キリスト教自体にとって、過去の歴史的な問いであると同時に、現在から未来への可能性に関わるものであって、ここに無教会を問う意義が存在する……」（芦名、2019、8）

まず「第二章：内村鑑三と日本的キリスト教——鈴木大拙との比較によって」では、日本的霊性に対する鈴木大拙の考えが内村鑑三や弟子の矢内原忠雄の「日本的キリスト教」の思想（土着化の問題）と同一の論理構造を見せていると分析する。鈴木は日本的霊性が鎌倉仏教において覚醒したと言うが、それについて著者は「鎌倉時代が民衆の実生活の現場において真に日本人の生命へと浸透したことを意味する」（芦名、2019、29）と分析し、「日本的キリスト教で論じられるキリスト教土着論」はそのような鎌倉仏教の「大地性」への眼差しを注ぐことが求められると主張した。（芦名、2019、37）

また「第三章：矢内原忠雄と平和思想」においては、第2巻で紹介した内村の「平和思想」が彼の弟子、矢内原忠雄にどのように継承されているのかを分析する。これは先ほども述べられたように「無教会」の平和思想が現在、そして未来にまでどのような形で続くべきなのかを究明することになる。「矢内原が、内村以上に、国策の動向を意識し……実はそれを批判するという仕方で平和思想を展開している点に見ることができる」（芦名、2019、54-55）という分析から、無教会の平和思想は過去に留まらず、変化する時代に積極的に応戦して来たことが分かる。それは矢内原の「絶対的」平和論へと至った。（芦名、2019、58） 相変わらず平和が威嚇されている現在の東アジアの国際情勢、そして過去退行的な日本国内の政治を見ると、この地域のキリスト教の平和思想が影響力のある「公共性」として寄与できる可能性を見出していると考えられる。

「第三章」の末尾に著者は、学問の自由を訴えた矢内原に注目し、「大学の軍事科学・軍事産業との関係は、過去の問題ではなく、現在の問題である」（芦名、2019、59）と意味深い指摘を残しているが、それと連動して「第四章：原子力とキリスト教思想——矢内原とティリッヒ」において原子力をめぐる科学技術の問題についてキリスト教がどのような姿勢を持つべきなのかを論じている。前述した矢内原の「平和思想」とともにパウル・ティリッヒの「科学技術論」を通して暴走する人間文明と科学技術の「批判的監視」の必要性を考察し

た。著者はこのような現代社会の問題は「キリスト教と世俗的合理性を宗教的多元性という問題連関において論じることを必要とする」と論断した。

最後に「第五章：南原繁の政治哲学とキリスト教思想」においては、内村鑑三の弟子、南原繁の代表作『国家と宗教──ヨーロッパの精神史の研究』(1942)を中心に、彼の政治哲学が見出した「全体主義」への警告を紹介する。南原は国民を戦争へと動員した日本精神や日本思想に厳しい批判を行い、戦後の日本にも一つの指針を提供した。そして南原が強調した「価値並行論」も矢内原と同様に「国家や宗教から独立した価値としての真理をめざす学問の自律性を現実化する取り組みである」(芦名、2019、96)と結論付ける。

以上のような内村から矢内原に至る「平和論」は、ナショナリズムによる国家権力の暴力(全体主義)と軍事力拡大、それを支える科学技術などを批判的、預言者的に扱っている。このような思想的な根底の一つとして著者は第三章「矢内原忠雄と平和思想」において、矢内原の論文「復活の教義について」（1937年）を紹介する。矢内原はコリントの信徒への手紙一15章の3節以下に登場するパウロの復活論を論じ、次の部分を引用した。

> 「キリストが十字架にかかり給うたのは我々に罪がある証拠。キリストが復活せられたのは我々の罪を赦された証拠である。それのみでない、キリストの復活は又キリストを信ずる我等自身の復活のさきがけといふ意味を有つ」(同書、137)、「身体の復活によりて現実生活上の矛盾（身体の不完全性。引用者補足）は完全に解消する。……進んで完く義しき者として生活し度い、自分の正しさを全うしたいという希求は、復活の信仰に迄行かなければ満たされない。……十字架の信仰は我々の不義に対する非難から我々を自由にし、復活の信仰は現実生活の不完全さに対する不満から我々を自由にする。」(同書、139)

矢内原はまず①私たち人間の罪を直視し、②その罪からの解放のためキリストの復活が先駆けになること、③その復活事件を通して人間世界の矛盾を解消し、④不義に抵抗する正義の実現を求めている。このような無教会主義者たちの認識は、パウロがローマの信徒への手紙 8-9 章において語った同胞認識を連想させる。すなわちパウロは前述したキリストの十字架上の苦難、そして復活について「私は確信しています。死も命も、天使も支配者も、現在のものも将来のものも、力あるものも、高いものも深いものも、他のどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から私たちを引き離すことはできないのです。」(ローマの信徒への手紙 8：38-39)と語る。しかし同時にパウロは「私には深い悲しみがあり、心には絶え間ない痛みがあります。私自身、兄弟たち、つまり肉による同胞のためなら、キリストから離され、呪われた者となってもよいとさえ思っています。」(ローマの信徒への

手紙 9：2-3)と言い、キリストへの愛と同胞への憐れみが同時に表現されたこの箇所は、内村が言う「二つのＪ」を思い浮かばせる。

キリスト教の信仰がイエス・キリストの十字架と復活事件という過去史に留まらず、その意味を現在の生きているこの場(地域・民族・国家)において再現し、その世界化という未来を実現する時に原動力になることを強調したのではないか。矢内原が注目したパウロの思想は復活による「不義と不完全さからの自由」であるとしたら、その自由を得ていない同胞の悲しみと苦痛に対する憐れみである。つまり、キリストから離されても同胞(日本人)がキリストの御旨に沿って歩んでいくことを望んだという逆説的な発想である。

矛盾に満ちる人間社会(世界)に対するパウロのこのような憐れみの姿勢は他にも見られる。例えば、旧約聖書においてアブラハムがソドムとゴモラの救いのため切に祈ったにもかかわらず結局滅びた。(創世記 18:27-32)[4] そして、イエス・キリストも堕落したエルサレムのために歎きながら訴えたにもかかわらず滅亡してしまった。(ルカによる福音書 13：33-35；19：40-42)[5] パウロも同胞のために上述のように告白したが、紀元後 70 年頃イスラエルも土地を失いディアスポラになった。その理由は何か。歴史は神のみが導くものではないからであり、「神の像」（imago Dei）である人間に与えられている課題であり使命であるからだ。パウロが「そこで神は、彼らが心の欲望によって不潔なことをするにまかせられ、そのため、彼らは互いにその体を辱めました」(ローマの信徒への手紙 1:24)と記したように、矢内原は神から任されているこの世の平和を実現する責任は自由を得られる人間が背負っていることを強調したのではないか。どのような方向に変化して行くか分からない「歴史的な状況」（historical context）の中でキリスト者の決断、そしてキリスト教の可能性の問題である。したがって「内村-矢内-南原」の思想に注目した著者が無教会キリスト教を考察する意義について「過去の歴史的な問いであると同時に、現在から未来への可能性」(芦名、2019、8)を述べた理由もここにあるだろう。

---

[4] 彼は言った。「わが主よ、もう一度だけ申し上げても、どうかお怒りになりませんように。もしかすると、そこには十人しかいないかもしれません。」すると主は答えられた。「その十人のために、私は滅ぼしはしない。」(創世記 18:32)

[5] ともかく、私は、今日も明日も、その次の日も進んで行かねばならない。預言者がエルサレム以外の所で死ぬことは、ありえないからだ。 エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、私はお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。 見よ、お前たちの家は見捨てられる。言っておくが、お前たちは、『主の名によって来られる方に、祝福があるように』と言う時が来るまで、決して私を見ることはない。(ルカによる福音書13：33-35) ； イエスはお答えになった。「言っておくが、もしこの人たちが黙れば、石が叫びだす。」エルサレムに近づき、都が見えたとき、イエスはその都のために泣いて、言われた。「もしこの日に、お前も平和への道をわきまえていたなら……。しかし今は、それがお前には見えない。(ルカによる福音書19：40-42)

## ３． おわりに：東アジア・キリスト教研究の新たな可能性の展望

### (1) 研究方法論と研究ネットワークの構築の必要性

研究叢書第３巻の結論において、著者は東アジア・キリスト教の地平モデルを具体化する多様な試みを終えた後、今後の研究が進んで行くべき方向性を示した。今までの東アジア・キリスト教研究が「交流史」的なアプローチが中心であったとしたら、キリスト教の諸団体、そこに属している宣教師や個人伝道者、逆方向としてキリスト教世界に渡って行った留学生や活動家など、多様な担い手が存在する。そのような研究対象の選択によって研究方法や結論が異なることになる点を指摘する。そしてその研究もほとんど文献資料に基づいた研究だった。したがって「東アジア・キリスト教の交流ネットワーク」、そしてその「交流がもつ意味やより厳密な実態を明らかにする」ためにも、今後は「文献研究とフィールド調査を組み合わせる点を特徴とすべき」(芦名、2019、107)であるとした。すなわち、文献研究とフィールド調査を組み合わせた「適切な方法論の構築」の必要性である。そして、そのような研究が可能になるための「共同研究」[6]とそのための研究ネットワーク（研究成果の翻訳交換など）の構築も求めている。[7]これは冒頭で示した「グローバル・ヒストリー」の近刊が欧米と日本の多様な分野と地域の研究者が共同研究として行なうことで良いモデルを提示したと考えられる。そして、悪化している東アジアの国際情勢を考える時、このような学問的・人的ネットワークは、平和を守り、実現して行くための有効な背水の陣になると確信する。このような実質的な研究活動の活性化のためにも、本書が提案している研究の方向性と方法論は良い参考になるだろう。

### （２）東アジア・キリスト教研究の「過去・現在・未来」

この研究叢書(全３巻)の企画は、本研究会（「アジア・キリスト教・多元性」研究会）のホームページの「研究会の趣旨」に示されている「研究会の目的」と「中心テーマ」に従った研究成果であることも一言残して置きたい。[8]「日本を含めたアジア、とくに東アジアのキリスト教をめぐる諸問題について共同研究を行う」という目的をはじめ、「１．東アジアのキリスト教史（過去）」、「２．東アジアの現在の宗教的状況（現在）」、「３．東アジ

---

[6] 「東アジア・キリスト教研究が、相互交流を通して東アジア・キリスト教に生成した個人や共同体の繋がり・ネットワークを研究対象とすることについて論じたが、このような研究は、単独の研究者によってカバーできるものではなく、共同研究という形態を取ることが必要になる。つまり、求められるのは、ネットワーク的に存在する研究対象に応じた、研究者のネットワークの構築なのである。」(芦名、2019、111)

[7] 「日本、中国、韓国といった諸地域間の交流については、他の諸地域の研究成果を相互に翻訳し合うことなどの工夫を行うことによって、内実を伴ったネットワークを地域内に、そして地域を越えて形成することが必要なのではないだろうか。」(芦名、2019、112)

[8] https://sites.google.com/site/asiachristianity/home ;「研究会の趣旨」、「アジア・キリスト教・多元性」研究会のホームページ

アにおける新しいキリスト教形成（未来）」という三つの中心テーマは、そのまま第１、２、３巻の内容に含まれている。もちろん基本的に近代における日本キリスト教の思想を扱ったが、それを東アジアのキリスト教というより広い視野から踏まえているのは、今後、中国、台湾、韓国など各地域におけるキリスト教思想をこのような観点から分析する研究モデルを提示しており、新たな学問的試みの可能性を示したという貢献を認めざるを得ない。

しかし、この研究も乗り越えなければならない一つの課題を残している。現在までの日本キリスト教史が代表的な三つのバンドに集中して研究されて来た典型的なカテゴリーやアプローチの傾向を、芦名も基本的にはそのまま踏襲している点である。すなわち「横浜バンド」の植村正久、「熊本バンド」の海老名弾正、「札幌バンド」の内村鑑三にその比較考察の範囲が留まっているため、東アジアのキリスト教に至る議論の展開が若干不足している印象が残る。もちろん矢内原忠雄や南原繁など内村の弟子たちが形成した無教会主義にまで視野を広げた事は、アジア・キリスト教との接点を模索するための重要な一歩と考えられるが、より果敢な研究対象の拡大が求められるのではないか。日本キリスト教史の中でも沖縄、台湾、朝鮮半島、中国などアジアの各地域と交流した人物を積極的に発掘し、再評価することによって「アジアにおけるキリスト教思想の交流と融合」をより具体的に、幅広く考察する必要がある。この課題は、本著作を一つのモデルとした後続研究に期待したい。「アジア・キリスト教・多元性」研究会の今後の研究成果に注目する理由でもある。

### （３）思想と歴史の「コンシリエンス」（consilience）

筆者は学部時代のキリスト教史講義で、ある老教授が「すべての歴史研究は、結局『思想史』に帰結する。人物史は個人の思想を、団体史も組織の理念を、民族史や国家史もその建国思想などを最終的に明らかにするため探求する」と語ったことを今までも覚えている。ある事件の事実関係や人物史の研究も、最終的にはその器に込められた思想に到達するということだろう。当時この話の意味がよくわからなかったが、日本のキリスト教史という歴史研究から出発し、それを東アジア的な視野、そして思想史的な次元まで研究の範囲を拡張したこの3冊の著作を読みながら気づくことが出来た。もちろん芦名は、欧米のキリスト教思想史を専門とする研究者であり、基本的な関心は「思想史」に辿り着くだろう。しかし上述した老教授の説明とは逆方向に、芦名は「日本におけるキリスト教思想」の問題から出発し、東アジアのキリスト教の現在のあり方、そして東アジアにおけるキリスト教の将来の可能性を展望することによって、抽象的観念（思想）から具体的現場（歴史）への帰結が可能になったのではないのか。

思想と歴史の境界線を乗り越え、その二つの領域の地平融合を説得力を持って確保したこの研究を、筆者は本書評のタイトルにも記したように「東アジア・キリスト教研究における

思想と歴史のコンシリエンス（consilience）」と表現したい。19世紀の科学史であり神学者であったウィリアム・ヒューウェル（William Whewell）は、異なる諸分野の観点や方法論を一致させて行くための帰納的推論を「統合（consilience）」という概念として考案した。それを社会生物学者であるエドワード・O・ウィルソンが1998年の著作『知の挑戦――科学的知性と文化的知性の統合』（*Consilience: The Unity of Knowledge*）[9] において再活用した。ウィルソンは過度に細分化及び専門化されている現代科学を統合・融合させて行くため、人文学と科学の積極的な対話と越境による諸学問の「統一」（unification）の必要性を力説した。したがって自らの分野にのみ陥り、視野の狭い研究者については「全体像に対する関心の欠如」[10] であると指摘する。

同様に、芦名はこれまで自然科学と人文科学（キリスト教学・宗教学）の統合（consilience）を主な研究テーマとして試みて来たことがわかる。[11] さらに東アジアのキリスト教研究にまで領域を拡げたこの研究成果においても諸分野との新たな地平の融合を試みたと考えられる。第１巻の副タイトルが『二つの地平が交わるところにて』であることからもわかるように、異なる西洋とアジアの思想が出会い、どのように新たな地平が展開されたのかに注目した。そのような新思想の生成過程の蓄積は、結局「歴史」として整えられる。したがって、著者は東アジア・キリスト教を扱うことによって「思想」と「歴史」の統合、地平の融合、交わりを試みた新たな「知の挑戦」（consilience）[12] をおこなったのではないだろうか。

以上のように、芦名定道の近刊３冊についてその内容をまとめ、紹介し、この研究が持っている意味について述べた。この成果が誘い水になって、東アジアの諸国においてもこのような新たな地平における研究が盛んになることを願う。それがこの著作に登場した先達のキリスト教思想家たちが夢見た世界の実現という道に参加する一つの方法になるだろう。

（ホン・イピョ　山梨英和大学准教授）

---

[9] E.O. Wilson, *Consilience: The Unity of Knowledge,Little,* Brown and Company, London,1998.；エドワード・O・ウィルソン『知の挑戦――科学的知性と文化的知性の統合』山下篤子訳、東京：角川書店、2002.

[10] エドワード・O・ウィルソン『知の挑戦――科学的知性と文化的知性の統合』山下篤子訳、東京：角川書店、2002、50.

[11] このような試みとして、芦名定道の代表著作は『宗教学のエッセンス――宗教・呪術・科学』（北樹出版、1993）、『自然神学再考――近代世界とキリスト教』（晃洋書房、2007）を、訳書としては、トーマス・F・トランス『科学としての神学の基礎』（水垣渉共訳、教文館、1990年）、アリスター・マクグラス『「自然」を神学する』（杉岡良彦・濱崎雅孝共訳、教文館、2011）などを挙げることができる。

[12] 同書の韓国語版は、ウィルソンの弟子である崔在天（チェジェチョン）教授（梨花女子大学）によって『통섭：지식의 대통합』（統攝：知識の大統合）というタイトルで翻訳された。「統攝」という言葉は儒教の性理学や仏教で使われて来た用語として「大きな茎や流れを掴む」あるいは「全体を把握し、治める」という意味である。